

# 国際日本 研究センター

International Center  
for Japanese Studies

# NEWSLETTER

ニューズレター  
東京外国語大学  
Tokyo University of Foreign Studies  
<http://www.tufs.ac.jp/icjs/>  
2018.04 No. 22

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |     |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----|
| ○国際シンポジウム「次世代に向けた日本研究の可能性—ポーランド・ロシア・ウクライナ—」<br>The International Symposium "Potential for the Next Generation of Japan Research: Poland, Russia and Ukraine".....                                                                                                                                                                                                                                                                                                           | P1  |
| ○対照日本語部門『外国語と日本語との対照言語学的研究』第22回研究会「[は][が]と判断—ドイツ語学と日本語学の接点—」<br>"Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 22nd Research Seminar "[ha], [ga] and Judgement—Interaction Between German and Japanese Linguistics".....                                                                                                                                                                                                                                          | P3  |
| ○対照日本語部門『外国語と日本語との対照言語学的研究』第23回研究会"Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 23rd Research Seminar.....                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       | P4  |
| ○平成28年度文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型）」「認知の異なりが言語教育および言語習得に及ぼす影響—海外日本語教育インターンシップ実践の記録、および産出データからの考察」<br>2016/2017 MEXT Human Resource Development Program for Science and Technology "Program to Supporting Research Activities of Female Researchers"<br>"The Influence of Differences in Cognition on Language Education and Acquisition—Record of Implementation of Japanese Language Education Overseas Internships and Observation of Data Produced"..... | P6  |
| ○対照日本語部門『外国語と日本語との対照言語学的研究』第24回研究会"Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 24th Research Seminar.....                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       | P7  |
| ○2017年10月～2018年3月 活動報告 Activity Report (Oct.2017—Mar.2018).....                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             | P9  |
| ○お知らせ Notice.....                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           | P10 |

## 国際シンポジウム「次世代に向けた日本研究の可能性—ポーランド・ロシア・ウクライナ—」 The International Symposium "Potential for the Next Generation of Japan Research: Poland, Russia and Ukraine"



＜会場の様子＞

本センターでは2018年2月17日（土）国際シンポジウム「次世代に向けた日本研究の可能性—ポーランド・ロシア・ウクライナ—」を開催した。これは2009年に設立されたセンターのこれまでの活動から2016年度に第2期を迎えた、今後に向けての方向性を具体化したものである。

本センターではこれまでさまざまな活動を行ってきた。年間10本以上のシンポジウム、研究会、そして毎年のジャーナルをはじめとする刊行物の発行などに加え、毎年夏には海外の第一線の研究者を招いた「夏季セミナー」を2012年度から開始し、2013年度からは国内外の大学院生による研究発表のワークショップも開催している。この成果を反映させたものとして、夏季セミナー参加大学を中心とした「日本語・日本研究コンソーシアム」も2016年度に結成した。また、海外の日本語教育、日本研究を行っている大学の調査を行っており、その成果を「日本語教育事情調査」としてセンターのホームページで紹介している。その数は2017年度末現在で33カ国、地域の77大学に及

んでいる。さらに、2011年度から毎年博報財団からの海外の研究者の受け入れも行っており、これまでに13名の研究者を特任研究員として受け入れてきた。これら、海外の日本語教育、日本研究を行っている諸大学との交流を大切にしてきた。

一昨年度第2期を迎えるにあたって、新しい方向性を開拓し始めている。一つの方針としては、これまで夏季セミナーを中心とした交流は日本研究の盛んな主に東、東南アジアの国が多く、コンソーシアムはそれらの大学が中心となっているが、この対象を広げる試みを行うことになった。今後はロシア東欧、中南米、アフリカ諸国との交流を深める計画がある。これまでには日本語教育、日本研究の盛んな近隣の国を中心にしていたが、これからはそれほど知られているわけではないが、現在活発に日本研究の行われている地域の諸大学とも交流していきたいと考えている。今年度はその第一歩としてロシア東欧地域との交流を深めるべく、これまでに受け入れてきたロシア東欧地域の研究者を招いて、その地の日本語教育、日本研究の動向を報告してもらうことになった。今後これらの大学にもコンソーシアムに参加してもらい、日本語教育、日本研究の輪を広げていきたいと思っている。

これまでの日本語教育事情調査でわかってきたことであるが、ロシア、東欧地域では日本に関心が深く、日本語教育、日本研究が活発に行われている。本学は全世界からの多くの留学生を受け入れているが、この地域から毎年優秀な学生が送り込まれているという事実もそれを裏付ける。今回はその状況を踏まえ、これまで博報財団からの研究員として受け入れてきたロシア、東欧地域の研究者に、それぞれの地域の日本語教育、日

本研究について報告してもらった。

今後は本学、本センターの強みを生かして、語学教育を基礎にもつ地域研究、日本語教育研究の蓄積、日本と諸地域との比較対照の視点からの日本研究を進め、日本語日本研究コンソーシアムの拡大、教材開発、遠隔教育などへの発展を考えていきたい。

## 「ポーランドにおける日本学の状況と将来の展望」

### ヤギェロン大学日本学科を例にして

スタニスワフ・マイヤー氏（ヤギェロン大学日本学科准教授）



＜マイヤー氏＞

かつてはポーランドにおける日本研究は文献をもとにした文学が中心であったが、近年は状況は変化している。ポーランド国内で日本語日本学関係の専攻を持つ大学は5大学だが、日本語教室は全国におよそ20箇所あり、日本語を学ぶ人も一定数存在する。その中で古都クラコフにあるヤギェロン大学では1987年の日本学科新設後、2004年ポーランドのEU加盟、ボロニア制度の導入に伴い日本学学部、大学院制度が導入された。日本学科は1学年定員が25～30名、これまでに博士号取得者を8名出している。3年間の学士課程では日本語の他に、文学、文化、日本学などの授業が行われている。2年間の修士課程では日本語の他、文学、日本語学、翻訳の授業が行われているが、修士課程進学者が少なく、また、文献学以外の歴史などの研究が難しいことが問題点である。

## 「ロシアにおける日本語教育」

ナジェージダ・ウェインベルグ氏

（イルクーツク国立総合大学付属人文・外国語・メディアコミュニケーション大学准教授）



＜ウェインベルグ氏＞

ロシアでは17世紀の日本人漂流者による日本語教育に始まる長い日本語教育の歴史がある。近代になってからは1870年からサンクトペテルブルグ大学で日本語専攻が始まっている。現在約40大学に日本語日本学専攻があり、日本語に加え、言語学、東洋言語学、日本語学／技術、経済学、歴史学などが専攻としてたてられており、そのほか、技術や経済系の大学でも日本語を教えるようになってきている。その中でモスクワ国立総合大学付属アジア・アフリカ諸国大学日本語学科で学生数140名、教師17名を擁している。現在、ロシア

全土で日本語関係の卒業生が約400名おり、その専攻は言語学、日本語学、日本語通訳、東洋言語学、国際コミュニケーション、地域学、教育、社会言語学などと多岐にわたっている。日本語学習状況について調査した結果、日本語教育課程では話す練習・会話のスキルが重視されるようになっているほか、日本語教育はオンライン教育の方向に進んでいることがわかった。

## 「ウクライナにおける日本研究の現状と課題」

### ～将来の発展の継続を目指して～

オクサーナ・アサドチフ氏（タラス・シェフチェンコ記念キエフ国立大学言語学院極東・東南アジア言語文学科准教授）

ウクライナの日本語学研究と日本文学研究は、日本語教育機関の発展よりはるか以前から行われてきた。ウクライナにおける日本研究は、日本語学、日本文学、日本語教育学など多くの分野にわたっている。日本文学では『古今和歌集』、村上春樹の作品、昔話などのウクライナ語への翻訳もあり、研究も進んでいる。日本語教授法に関する研究はまだ余りされていないが、今後は進むものと思われる。現在はキエフ国立大学では日本語、日本研究の学位は「外国語文献学」の中でのものとなっており、主に東洋言語学者養成となっているが、今後は東洋学者の他にも、東洋言語プラス他の分野での知識を持つ専門教育につなげていく必要がある。これによって広範囲に興味を持つウクライナ人学習者も増えていき、さまざまな分野で日本研究も活発に行われるようになるであろう。

## 「学習者の立場から」

アガタ・クリコフ氏

（本学大学院総合国際学研究科後期課程学生）



＜クリコフ氏＞

日本のアニメをきっかけとして日本文化に興味を持ち、ポズナンのアダム・ミツキエヴィチ大学で日本学科に入学し、卒業後日本に留学した。当時日本語日本学科を持つ大学はポーランド国内で3つしかなかったが、現在はさらに2つ増えている。日本語を勉強するほかに、日本の歴史や日本語学なども勉強した。学士修士が一体化した5年のコース中に一度日本語日本文化研修留学生として1年日本に留学し、卒業後研究生として来日して現在博士後期課程に在籍している。同級生の中には日本と関係のある仕事をしている人もいるが余り多くない。

（坂本 恵）

ICJS held the international symposium “Potential for the Next Generation of Japan Research: Poland, Russia and Ukraine” on February 17th 2018. ICJS has valued exchange with foreign universities and researchers, through its annual summer seminars, graduate student workshops, surveys about Japanese language education at overseas universities and by receiving Hakuho Foundation researchers. One result of this was the formation in 2016 of a “Consortium for Japanese Language and Japanese Studies (CJLJS)” with 10 overseas universities. The number of countries involved will be increased going forward. This year, as a trial, the Center invited three researchers from universities in Russia and Eastern Europe previously affiliated to the Center as Hakuho Foundation invited researchers, who gave

presentations on trends in Japanese language education and Japan research. The Center hopes these researchers' home institutions will participate in the Consortium in the future, expanding the circle of Japanese education and Japan research. **Dr. Stanislaw MEYER of Jagiellon University** presented "The State of and Future Prospects for Japan Studies in Poland – The Example of the Japanese department at Jagiellonian University", **Dr. Nadezhda VEINBERG from Institute of Philology, Foreign Languages and Media Communication, Irkutsk State University** presented "Japanese Language Education in Russia", and **Dr. Oksana ASADCHYKH from The Institute of Philology of Kyiv National Taras Shevchenko University** presented "The Current State of and Issues for Japanese Language Education in Ukraine – Maintaining Growth in the Future". Furthermore, **Agata KULIKOW**, a Polish PhD student at TUFs presented their experiences as a learner of Japanese. (SAKAMOTO Megumi)

**対照日本語部門『外国語と日本語との対照言語学的研究』第22回研究会**  
**「[は]」「が」と判断 — ドイツ語学と日本語学の接点 —**  
**"Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 22nd Research Seminar**  
**"'ha', 'ga' and Judgement – Interaction Between German and Japanese Linguistics"**

日 時：2017年9月23日(土) 13:05～17:45

場 所：東京外国語大学 研究講義棟 115 大講義室

発表者・講演者と題目

- 「主語・述語の文法と主語・述語の論理 - Anton Marty の言語論を通じて -」 藤縄康弘氏(東京外国語大学)
- 「ドイツ語 V2 と日本語「は」との機能的構造的等価性：二重判断の言語化」 田中愼氏(千葉大学)
- 「助詞の語性・語列の意味・文としての意味 - 「は」「が」をめぐる -」 尾上圭介氏(東京大学名誉教授)

### 趣旨説明

“thetic judgment”（単純判断）と“categorical judgment”（カテゴリー判断・二重判断）という概念は、Brentano や Marty らドイツ語圏の哲学者によって 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて提唱されたものだが、1972 年の黒田重幸の論文において日本語の「は」と「が」の用法と関連して再び取り上げられるようになった。そこで、本研究会では、ドイツ語学と日本語学の研究者をお招きし、それぞれの立場からお話をいただくこととなった。

(成田節)

### 藤縄康弘氏「主語・述語の文法と主語・述語の論理 - Anton Marty の言語論を通じて -」



＜藤縄康弘氏＞

ドイツ語学を専門とする藤縄氏は、19 世紀スイスの哲学者 Anton Marty がその言語論の中で提唱した 2 種類の判断、すなわち「カテゴリー判断」と「単純判断」という観点から、ドイツ語と日本語の文法について対照させつつ論じた。

Marty の言語論では、「カテゴリー判断」は「この色は赤だ」のように論理的な主語・述語が揃った判断である。一方、「単純判断」は論理的な主語を欠く判断で、ドイツ語では存在文や非人称文がその典型例であるといえる。日本語については、これらの判断の別を「ハ主語」「ガ主語」によって示すという Kuroda (1972) の論を検討し、「ハ」と「ガ」の使い分けが両種判断と必ずしも 1 対 1 対応するわけではない（ただし決して恣意的な関係というわけでもない）こと、量化表現に関する考察から日本語にこそ Marty の見方がそのまま当てはまることを述べた。またドイツ語については、両種判断の反映として、命令文は基本的にカテゴリー判断を示すものの、単純判断を示すこ

ともあり得るのに対し、希求文は単純判断のみ示すとした。

さらに、ドイツ語と日本語の両言語を見据え、論理形式と文法形式の対応に 2 つのタイプがあると論じた。1 つは 2 種類の判断に対し 1 つの文法形式が対応するもので、ドイツ語の平叙文（および疑問文）がこれに含まれる。もう 1 つは 2 種類の判断に対し 2 つの文法形式が対応するもので、日本語では平叙文（および疑問文）が、ドイツ語では命令文や希求文がこれに含まれる。その際、単純判断に特化した表現形式はあり得ても、カテゴリー判断に特化した表現形式はないという非対称性が認められた。

藤縄氏の発表は、両言語の文法形式を考える上での論理的な構造を理解するという点で示唆に富むものであった。発表後の質疑応答も活発に行なわれた。

(降幡正志)

### 田中愼氏「ドイツ語 V 2 と日本語「は」における機能的・構造的等価性について：二重判断の言語化」



＜田中愼氏＞

Kuroda (1972) は、Brentano, Marty らによって、19 世紀後半から 20 世紀の前半に提案された二つの種類の判断（カテゴリー判断＝二重判断、単純判断）を、日本語研究における文分類（判断文、現象文）の伝統からヒントを得つつ、言語学に再導入した。カテゴリー判断は、陳述（predication）のベース（太郎は）と陳述（試合に勝った）という二つの部分からなる。他方、単純判断（thetic judgment）は陳述を分析せずに一つのものとして提示する形式である（太郎が試合に勝った）。これは認識を同定し、判断を表出し、聞き手に働きかけるといった言語の機能に基づいた汎言語的な概念である。

カテゴリー判断は、当該言語の無標な形式で表される。すなわちドイツ語では主語を有し、定動詞を文頭から 2 番目に配置する V2（定動詞第 2 位）文で、日本語では「は」を有し主観的判断を表す判断文で基本的には表される。他方、単純判断は一般に有標な形式で実現される。日本語では「は」を伴わない現象文が単純判断の基本的な表現形式であるが、ドイツ語では V2 文がその周辺的な用法として単純判断の表出に用いられる。カテゴリー判断が無標、単純判断が有標であることの一つの表れとしては、具体的な事象の観察（ヴェルナーはスキーが上手だねえ）であるカテゴリー判断が、知識の蓄積（ヴェルナーがスキーが上手なこと）となる単純判断に時間的に先行していることなどが挙げられる。

また、言語ごとの陳述の形の違いは、テキストへの文の「埋め込まれ度」と深く関係している。ドイツ語など、基本的には主語を明示する言語では文の境界は明瞭であり、それぞれの文を言わばブロックとしてテキストが構成される。一方、日本語など主語よりトピックが重要な言語では、文の輪郭は不明瞭になりがちであり、それらが粘土をつなげるようにトピックを軸にしてテキストが形成される。(成田節)

が主語と似ていながらも主語とは違う成分であることから「題目語」という概念が要請された。伝達上のある気分につけた名称であるから、その規定は困難だが、典型的な題目語の要件として2項目3点が提示できる。なお、ガ格項である「Xハ」はほぼ「二重判断」の主語と言ってよさそうだが、「Xガ」が全て「単純判断」の主語というわけではない。(3) 藤縄氏発表との関係で、命令文と主語との関係について数点を指摘した。

(川村大)

#### 尾上圭介先生(元東京大学)「主語述語関係の内実」



(述定) 文に主語述語関係が存在することとは言語普遍的である。そのことの内実を考えた上で、主語述語関係について考えるべきことを3点取り上げた。(1) 日本語における「主語」は「ガ格(に立つ)項」と規定するしかない。その内実は、認識の側面で「事態認識の中核」、存在の

面「存在するもの」という2面の相即である(これは言語普遍的な主語の内実)。ただし、「水が飲みたい」「昔のことが思い出される」など(「B級主語」)は「事態中のモノ的中心」であると言える点で主語の内実を満たすが、多くの主語と異なり「事態認識の基盤」とは言い難い(述定に先立って承認されている主語ではない)。なお、「B級主語」を意味的特徴から主語ではないとする議論は当たらない。(2) 日本語の「Xハ」

本日の研究会は、日本語と類型的に異なる言語を対照させることにより言語の普遍性と個別性を探るという対照日本語部門の研究会にふさわしい企画と議論であり、観客の多くの皆さんから高い評価が得られた。



<会場の様子>

**Outline:** The concepts of “thetic judgement” and “categorical judgement” were proposed in the late 19th and early 20th centuries by German speaking philosophers like Brentano and Marty. Shigeyuki KURODA revived the concepts in his 1972 paper in relation to the uses of “ha” and “ga”. This seminar welcomed scholars of German and Japanese linguistics to provide their perspectives. **Yasuhiro FUJINAWA** “The Grammar and Logic of Subject and Predicate through the Theory of Anton Marty” The presenter, a specialist in German linguistics, contrasted German and Japanese grammar from the perspective of “thetic judgement” and “categorical judgement”, the two types of judgement proposed by the 19th century Swiss philosopher Anton Marty. **Shin TANAKA** “The Functional and Structural Equivalence of V2 in German and ‘ha’ in Japanese: The Verbalization of Double Judgement” KURODA (1972) reintroduced the two types of judgement (categorical/double judgement and thetic judgement) proposed in the late 19th and early 20th centuries by Brentano, Marty and others, gaining hints from the traditional division in Japanese linguistics between judgment sentences and descriptive sentences. **Keisuke ONOUE (formerly of The University of Tokyo)** “The Facts about Subject-Predicate Relations” In essentially the same way that all languages have nouns and verbs, it is a language universal that (predicative) sentences contain a subject and a predicate. These are expressed syntactically, semantically, and psychologically, even if there are some differences between languages. The presenter stated that the absence of a syntactically definable subject does not necessarily mean the concept of subject is absent, and raised related issues.

### 対照日本語部門『外国語と日本語との対照言語学的研究』第23回研究会 “Contrastive Study for Japanese and Other Languages” The 23rd Research Seminar

日時：2017年12月9日(土) 14:00～17:50

場所：東京外国語大学 研究講義棟 226 講義室

発表者・講演者と題目

○「話しことばにおける自動詞と他動詞の使用—親子談話の分析—」 鈴木 陽子氏(東京外国語大学:言語学)

○「モンゴル諸語における非定形動詞の定形用法の発達：日本語との若干の対照」 山越 康裕氏(東京外国語大学:モンゴル諸語)

○「日本語社会はなぜ発話の非流ちょう性に寛容なのか」 定延 利之氏(京都大学:言語学、コミュニケーション論)

#### 鈴木陽子氏 「話しことばにおける自動詞と他動詞の使用—親子談話の分析—」

本発表では、6つの自他動詞ペア(「あくーあける」「しめるーしめる」「はいるーいれる」「でるーだす」「のるーのせる」「おちるーおとす」)がどのように獲得されるのかを言語コーパス



<鈴木陽子氏>

CHILDESを用いて検証している。これらの動詞の自他の使い分けは、日本語学習者にとっては習得が難しいが、本発表では、母語話者の言語獲得の過程を、主に自然発話データを用いて構文文法論(Construction Grammar)の観点から論じている。

第一の実験では、自動詞と他動詞が使用される構文的な環境をについて論じている。その結果、自動詞はテイル形、ル形、タ形での使用が多く、他動詞は意志ある文脈で用いられる傾向が見られる点が明らかになった。また、子供の使用する構文と養育者が使用する構文が一致する傾向があることを示すとともに、自動詞と他動詞の獲得時期はほぼ同じであるこ

とを明らかにした。

第二の実験では、子どもはインプットされた情報に基づいて、自動詞と他動詞の形式や意味をどのようにして区別して正しく習得しているかを論じた。具体的には、格助詞、有生性、構文などの要素に注目しながらクラスタ分析を行うことで、テイル形とタ形が表す発話意図と、テ形が表す発話意図が異なる点を明らかにした。

第三の調査では、自動詞と他動詞に見られる様々な誤用を扱った。自動詞と他動詞では、両方向に誤用が確認されたが、自動詞を他動詞として使用する誤用の方が多い点が明らかになった。

調査の結果、子供は頻繁にインプットされる構文を用いて動詞の使用を開始し、その後、徐々に使用できる構文の種類を増やしたり、様々な名詞と組み合わせて、動詞を使用するようになる点が明らかになった。また、自動詞と他動詞の使用は統語における特性の違いを表すだけでなく、異なる談話的な機能と結びついていて点が明らかになった。このような談話機能の違いも、動詞の自他の区別に貢献していると考えられるであろう。

(大谷直輝)

#### 山越康裕氏「モンゴル諸語における非定形動詞の定形用法の発達：日本語との若干の対照」



現代のモンゴル諸語では、主節における非定形動詞の文末用法が広く分布するという。本来は主節の述語として定形動詞を使用すべきところが、分詞や条件副動詞といった非定形の動詞が実際には用いられるのである。この点につき、山越氏は自身

＜山越康裕氏＞ のフィールドワークの成果や種々の

データ、また中期モンゴル語の文献資料を駆使し、地理的にも歴史的にも幅広く、かつ豊富な文例を用いた実証的な研究に基づき発表を行なった。

13世紀に著されたとされる『元朝秘史』（中期モンゴル語）を観察すると、ほとんどの場合に主節の述語として定形動詞が用いられているが、現代においては、北東部モンゴル諸語（ダゲール語、ブリヤート語、ハムニガン・モンゴル語、オイラト語など）では分詞の文末用法が認められ、南西部のシロンゴル・モンゴル諸語（モンゴル語、マングェル語、シラ・ユグル語、ボウナン語など）では願望や依頼などのモダリティを表す条件副動詞が主節の述語として用いられる。

中期モンゴル語では定形動詞が主節の述語として用いられたが、時代を経て現代では非定形動詞が主節の述語として多用され、しかもその用法の差が地理的にかなり明瞭な分布を示している。

こうした非定形動詞の定形用法には、日本語の「言いさし」や終止・連体形の合一にともなう文末モダリティ形式の発達といった通時的変化と類似する側面も見られるため、あわせて日本語との対照についても論じた。発表後の質疑応答では、とりわけ日本語との対照における類似や相違についての議論が活発に行なわれ

た。(降幡正志)

#### 定延利之氏「日本語社会はなぜ発話の非流ちょう性に寛容なのか」



音声言語の非流ちょう性の実態について、定延先生ご自身の仮説にもとづく2種類の調査とその結果についてお話をうかがった。

まず、音声言語は文字言語よりも人間の言語として、より基礎的な地位を占めているにもかかわらず、実際の研究が文

＜定延利之氏＞

字言語中心であることを指摘し、その理由として音声言語が本来的に非流ちょう (disfluent) だからではないかと説明された。音声言語は本来、対面式コミュニケーションのことばであり、相手の反応を見ながら即時的に発せられることばは、どうしても非流ちょうになりがちである。従来、途切れやよどみがないことを流ちょうとする伝統的な考えから母語話者の発話は流ちょうであるとしていたが、最近では母語話者の発話も基本的には非流ちょうと考えられ、母語話者のよどみも流ちょうと捉えるようになった。非流ちょう性は次の5つのタイプに分けられる。

○タイプ1：記憶不全による呼応のくずれ

・重複（例：暴れる馬から落馬する）

・欠如（例：彼のいいところはやさしいです）

○タイプ2：記憶不全によるループ

（例：やっぱり選手層がやっぱり厚いからやっぱり）

○タイプ3：小規模化によるコマ切れ（例：品川で、新幹線に、乗り換えて、…）

○タイプ4：ことばが出てこず発話が停滞

・夾雑物挿入（例：え〜と（ブルキナファソ）

・代用（例：ブルなんとかファソ）

・延伸（例：ブルー）

・とぎれ（例：ブル、）

○タイプ5：言い間違い（例：ナンボジアカンミン）

今回はタイプ4の延伸に着目した報告がされた。言語の形態的類型から見た場合、日本語のような膠着性を持つ言語は、言語処理のプロセスにおいて、“buffer” というインプットした情報を一度貯めて待つというプロセスを経るために、文法的境界ではないところで延伸が生じやすくなるという「膠着性仮説」(Sadanobu and Kang 2016) が立てられる。

調査1では膠着性の高い言語（日本語、韓国語、タミル語、トルコ語、ハンガリー語、シンハラ語）の対面式録音ブースでの実験によりその仮説が実証された。

調査2は、話者間の差の問題について「（自分はそういう話し方はしないが）そういう話し方をする話者はいる」という形で解消するための知覚実験である。調査1の調査言語にフランス語と中国語を加え、計8つの言語それぞれで4つのパターンの電話対話の片方だけの音声を作成した。それぞれのパターンには4つの要素（A: フィラーと戻し付きの跳躍的上昇、B: フィラーと言い

間違い、C: フィラーと形態素内部の延伸型続行方式のつかえ、D: フィラーのみ)を含め、作成した音声聞かせ、本物の電話対応であると思うか否かを判断してもらった。その結果、日本語ではCのパターンを本物ではないと判断した割合が最も多かった。今後はデータの量をさらに増やし、フィラーやつかえなどの要素の回数を決めるなどさらに信頼性を高めていくということであった。無限の知見にもとづくユニークな実験と優しい語り口に、学内外の研究者や学生で埋め尽くされほぼ満席の会場は皆“定延先生ワールド”に魅せられていた。(谷口龍子)



＜現場の様子＞

**Yoko SUZUKI** “The Use of Intransitive and Transitive Verbs in Spoken Language – An Analysis of Parent-child Discourse” The presentation verified how 6 pairs of in/transitive verbs (aku-akeru, shimaru-shimeru, hairu-ireru, deru-dasu, noru-noseru, ochiru-otosu) are acquired using the CHILDES corpus. **Yasuhiro YAMAKOSHI** “The Development of Finite Uses of Infinitive Verbs in Main Clauses in Mongolic Languages: A Brief Contrast with Japanese” Sentence-final infinitive verbs appear widely in main clauses in Mongolic languages. Gerundives and conditionals are used as main clause predicates where finite verbs should be used. The presenter offered an empirical study using results and data from his fieldwork and Middle Mongolian historical records in a historically and geographically wide-ranging study replete with examples. **Toshiyuki SADANOBU** “Why is Japanese Society Tolerant of Speech Disfluency?” The presenter introduced the results of two surveys based on his own hypothesis regarding the state of speech disfluency. He noted that while spoken language occupies a more fundamental position in human language, most studies focus on written language, and suggested that this is due to the fundamental disfluency of spoken language.

平成 28 年度文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型）」「認知の異なりが言語教育および言語習得に及ぼす影響－海外日本語教育インターンシップ実践の記録、および産出データからの考察」（研究代表者：東京外国語大学谷口龍子、共同研究者：東京農工大学篠原和子）、国際日本研究センター国際日本語教育部門共催、共同研究発表会

2016/2017 MEXT Human Resource Development Program for Science and Technology

“Program to Supporting Research Activities of Female Researchers” “The Influence of Differences in Cognition on Language Education and Acquisition – Record of Implementation of Japanese Language Education Overseas Internships and Observation of Data Produced”

日時：2018 年 2 月 5 日（月）13:30～17:20  
場所：東京外国語大学 本部管理棟 2 階 中会議室  
発表者・講演者と題目

第一部「海外日本語教育インターン派遣によって誰が何を得られるのか」  
○趣旨説明＆「本学における海外日本語教育インターン派遣の取り組み」  
谷口 龍子（東京外国語大学）

○「リュブリアナ大学での日本語教育インターン生受け入れの事例」  
守時なざ氏（リュブリアナ大学：スロベニア）

○「初級日本語学習者の作文に見られる誤用の分析」  
伊藤 怜那（立教大学学生）

○「海外日本語教育インターン派遣によって何が得られたか」  
チャン ティ ミー（東京外国語大学博士後期課程）

○「グルノーブル大学での日本語講師受け入れの事例－文化的・認知的な違いから互いに学ぶこと」

東 伴子氏（グルノーブル・アルプ大学：フランス）

○「遠隔日本語教育の実践－淡江大学（台湾）とのジョイントエデュケーション」  
林 俊成氏（東京外国語大学）

第二部「認知の異なりが言語教育および言語習得に及ぼす影響」

○「学習者の読解プロセス：名詞修飾表現の理解によるテキスト主題の理解への影響」  
守時 なざ氏（リュブリアナ大学：スロベニア）

共同研究発表会は二部構成で行われた。第一部では、インターン派遣の実践そのものについての報告であり、インターン生を送り出す側、受け入れる側、派遣される学生のそれぞれにとってどのようなメリットとデメリットがあるのか議論を行った。

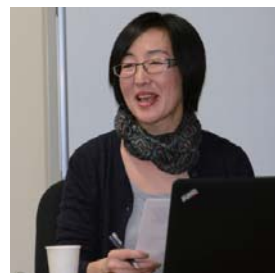
まず、送り出す側として、谷口が本学におけるこれまでの海外日本語教育インターン派遣の取り組みと変遷について説明した。2016 年度以降、数か月単位の長期派遣が増え、派遣先がこれまでの欧米諸国からアセアン諸国中心になったことにより、現

地で英語によるコミュニケーションが取れないことがあり、インターン生にサバイバル能力がこれまで以上に求められるようになったこと、日本語教育に関しては教壇実習の機会が多くなり教育実践の機会が増えたことが報告された。



＜林俊成氏＞

本学の林俊成教授からは、淡江大学（台湾）の学生との遠隔日本語教育の実践報告があった。授業は、接続練習及び既習内容の会話練習→用意された教案に基づいた教育実習→自作教案を用いた教育実習→Web教材の作成→反転講義形式の教育実習といった手順で行われる。遠隔教育を通じて教える側である本学の学生、



＜守時なざ氏＞

学ぶ側である淡江大学の学生との授業外での継続的な交流に発展しているということである。

派遣の受け入れ側からは、まずリュブリアナ大学守時なざ准教授から報告があった。当該大学では本学の学生だけでなく複数の大学からインターン生を受け入れており、その形体は短期集中日本語実習型、授業編入型、通年実習型の3種類に分かれる。本学からのインターン生には授業編入型が採用され、インターン生が実際の授業に入り込み、現地の教員とチームティーチングを行うことで日本語教育の方法や実践を体験しているとのことである。



&lt;東伴子氏&gt;

後者のタイプの学生も新たな学習スタイルに気づき、新たな教師と学生のコミュニケーションを実践することにより、言語運用能力面でも異文化の面でも得るものが多いという。

インターン派遣の経験者としては、チャン・ティ・ミー氏（本学博士後期学生）と伊藤怜那氏（発表時は立教大学学生）からそれぞれ報告があった。リュブリアナ大学に3週間派遣されたミー氏は、学習目標の立て方、授業の展開の仕方や誤用を修正するタイミングを知る経験でインターン派遣が有益であり、日本語を母語としない日本語教師としての自信につながったという。同じくリュブリアナ大学に長期派遣された伊藤氏は、インターンの期間中に収集した日本語学習者の作文データにおける助詞の誤用のパターンについて分析結果を発表し、日本語教育インターン派遣で得た情報を研究につなげる事例を紹介した。

第二部は、本研究の本来の趣旨につながる日本語学習者データの分析に関する成果発表である。再び守時氏より、認知の異なりが言語習得に及ぼす影響という本研究のテーマへの足掛かりと

グルノーブル大学の東伴子准教授からは、レクトレス（任期付き講師）の雇用に関して報告があった。講師たちが日本語を多く使って話すことにメリットを感じる学生もいる一方、フランス語を話さないためコミュニケーションが十分にできないというような否定的なコメントをする学生も見られるという。しかし、

して、日本語学習者の読解プロセスに着目し、名詞修飾表現を理解するパターンについて分析結果が発表された。

本研究会での発表をふまえて、後日、ダイバーシティ事業における共同研究者である東京農工大の篠原氏よりコメントが述べられた。「日本語教育の現場に携わる教師たちの経験、思想、実践といった幅広い視点からこれらの課題に取り組み、成果をあげた。現場から理論、理論から現場へのダイナミックな橋渡しが試みられたこと、また、ややもすると欧米の言語、特に英語教育が中心になりがちな応用研究の状況にあって日本語教育に焦点を当てた点には、特に大きな意義があった」という概要であった。今後は、日本語学習者の産出データをもとに、共同研究者の協力を得ながら、認知言語学の理論や分析のアプローチを活用して分析、研究を中心に進める予定である。（谷口龍子）



&lt;会場の様子&gt;

Joint research presentations were held in two sessions. The first reported on Japanese language education overseas internships and their implementation, discussing the merits and demerits for dispatching institutions, receiving institutions and the student interns. First, **Ryuko TANIGUCHI** explained past initiatives and changes concerning the dispatch of interns from TUFS. **Nagisa MORITOKI (Assistant Professor, University of Ljubljana)** reported on the receiving of interns. **Chunchen LIN (TUFS)** gave a practical report on long-distance Japanese education conducted with students from Tamkang University (Taiwan). **Tomoko HIGASHI (Assistant Professor, Université Grenoble Alpes)** reported on the employment of “readers” (fixed-contract lecturers). **TRAN THY My (TUFS PhD student)** and **Reina ITO (then student at Rikkyo University)** gave reports on their experiences as interns. The second session consisted of presentations related to the analysis of Japanese learner data, this research project’s original aim. (Ryuko TANIGUCHI)

## 対照日本語部門『外国語と日本語との対照言語学的研究』第24回研究会 “Contrastive Study for Japanese and Other Languages” The 24th Research Seminar

日時：2018年3月3日（土）

場所：東京外国語大学 研究講義棟 419 号室 語学研究所

発表者・講演者と題目

○第二言語話者が参加する会話の研究

大津 友美氏（東京外国語大学：談話分析）

○チュクチ語における自他動詞の派生関係

呉人 徳司氏（東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所：言語学、チュクチ語）

○日本アニメ英語翻訳のローカル化・グローバル化・「ハイパーローカル化」

井上 逸兵氏（慶応義塾大学：社会言語学、英語学）

### 大津友美氏「第二言語話者が参加する会話の研究」

大津氏は、通常、母語話者同士の分析に使われる会話分析 (Conversation Analysis) の手法を第二言語話者が参加する会話の研究にいかに応用できるか、またその結果をどう日本語教育に生かせるかという2点を中心に話された。会話分析とは1950年代に H.Sacks を創始者とし、その後、E.A.Schegloff G.Jefferson



&lt;大津友美氏&gt;

によって展開された社会学エスノメソドロロジーを基盤とした会話の分析の手法の一つである。会話を秩序立ったものとして展開するために、会話参加者がしているやり取りを明らかにすることを目的としている。会話分析の特徴としては、当事者が自分たちの相互行為の展開をどう分析しているかを観察する”emic”な視点からの分析であること、またそれぞれの相互行為のその時々状況に敏感に対応するという”context sensitive”という特徴がある。

その後、Firth & Wagner(1997,1998) などから会話分析を取り入れた第二言語習得研究が盛んになり、現在では下記のとおり、研究の種類は多岐にわたる。

- ①相互行為能力 (interactional competence) に関わるもの
- ②第二言語話者のカテゴリーに関わるもの (できることの記述、アイデンティティ協働構築など)
- ③第二言語話者が参加する相互行為に関わるもの (formal/non-formal institutional setting, casual conversation)
- ④教材や教授法に関わるもの (森(2004)、岩田(2016)など参照)

相互行為能力の構成要素に関する考え方は研究者によって様々であるが、会話分析を用いて、それぞれの能力がどのように変化しているかを通時的に観察する縦断的な研究が広く行われている。たとえば、語りの聞き手としての反応が、「聞いている」「わかっている」ことを示すあいづちなどのサインから、相手の語りと似たような語りを返すといった変化などである。

さらに、相互行為能力の評価として従来の口頭テストが実際の会話に相違点が見られる点や、専門分野での活動に参加する能力の評価が測られていない点など実際の相互行為能力の評価には検討が必要であることが主張されている。

今後、会話分析の手法が第二言語習得に応用される可能性は限りなく、第二言語習得研究のパラダイムが変わりつつあることが実感できる貴重な発表であった。(谷口龍子)

#### 呉人徳司氏「チュクチ語における自他動詞の派生関係」



チュクチ語は、アジア大陸の北東端 (ロシア連邦)、チュコト半島およびその周辺で話されている言語である。チュクチ語研究の専門家である本学 AA 研の呉人徳司先生により、チュクチ語の動詞の自他の派生関係についての研究発表があった。

＜呉人徳司氏＞ 次に「3. 動詞の自他と名詞項」では、自動詞と他動詞の形態的対応関係を、(1) 自動詞語幹から他動詞語幹の派生、(2) 他動詞語幹から自動詞語幹の派生、(3) 共通語根から自動詞・他動詞それぞれの語幹の派生という3種類の対応について、それぞれ豊富な実例を挙げながら詳しい説明がなされた。とりわけ(2)の他動詞語幹から自動詞語幹の派生にはさらに逆使役 (anticausative) と逆受動 (antipassive) という2つの方法があり、チュクチ語の特徴的な派生として興味深い解説があった。

まず「1. チュクチ語の類型論的な特徴」で、チュクチ語が能格型の言語であり、1語の中に多くの形態素を取り込むことができるという特徴が紹介された後、「2. 動詞の分類」で動詞を取りうる名詞項の数から自動詞と他動詞の位置付けが確認された。

次に「3. 動詞の自他と名詞項」では、自動詞と他動詞の形態的対応関係を、(1) 自動詞語幹から他動詞語幹の派生、(2) 他動詞語幹から自動詞語幹の派生、(3) 共通語根から自動詞・他動詞それぞれの語幹の派生という3種類の対応について、それぞれ豊富な実例を挙げながら詳しい説明がなされた。とりわけ(2)の他動詞語幹から自動詞語幹の派生にはさらに逆使役 (anticausative) と逆受動 (antipassive) という2つの方法があり、チュクチ語の

特徴的な派生として興味深い解説があった。

「4. 動詞の使役と名詞項」では、チュクチ語で発達している形態的使役についての分析が紹介された。使役動詞を派生する際に用いられる接周辞に基づき、6つの使役動詞の派生パターンが論じられた。中でも形態的には逆受動だが機能的には使役の働きをするという興味深い派生パターンについては特に詳しい分析と紹介があった。最後に「5. 名詞抱合と動詞の自他」でチュクチ語の形態法を特徴付ける重要な手法の1つである名詞抱合についての分析があった。

呉人徳司氏の研究発表は内容が盛りだくさんであり、時間の関係で一部の現象の紹介を省略せざるをえないほどであった。質疑応答の時間も、日本語の使役とチュクチ語の使役の相違点について活発な議論が行われ、非常に充実した研究発表となった。

(三宅登之)

#### 井上逸兵氏「日本アニメ英語翻訳のローカル化・グローバル化・ハイパーローカル化」



標題の「ローカル化」「グローバル化」「ハイパーグローバル化」は、アニメ等の日本コンテンツの英訳に見られる傾向の変化を捉えたものである。井上氏はこれを「となりのトトロ」などのアニメの英語 (字幕) 翻訳を具体的に示しながら論じた。

「ローカル化」は主に1990年代の英訳に見られ、アメリカ文化への受入れられやすさに配慮した「受容翻訳」を指している。「となりのトトロ」の英訳 (1993年版) では、サツキたちが引っ越してきたシーンで、父親の「引っ越してきましたー。よろしくお願ひしまーす。」という挨拶が、“Looks like we’re going to be neighbors! Pleasure to meet you!” と訳されているなどがその例である。他に、日本語では「じゃまだなあ」という陳述型の表現が、英語訳では“Move!” という行為指示型の表現になっている (ただし「行かぬえ方がいいぞ」に“I wouldn’t go”を当てるという逆の対応もある) 例や、サツキが畑のきゅうりを食べる際の「いただきます」に、友だちのミチコのことを考えての“Michiko will be jealous!” という訳が当てられている例、さらに「おうちの方はいらっしゃいますか?」に対して、少年が言葉を発せずに農作業中の父親を指さして答えているが、英訳では“Therel!” と言葉を補っているなどの例も挙げ、このような対応は、ポライトネス理論の枠で捉えられると説く。

ビジネス文書などには日本語から英語を介して中国語へ翻訳されるというような重訳 (relay translation) がしばしば見られるが、このように英語を非母語話者にも分かりやすい仲介言語としても利用することを英語の「グローバル化」と見なすことができる。日本アニメの英訳にも2000年代に入ってグローバル化が見られた。1990年代と2000年代の翻訳データを比べると、受容翻訳のための語句の挿入、削除、置換えの減少と、他方では逐語

的な訳（たとえば「いただきます」を“Looks delicious!”と英訳）の増加が観察できるが、これは、日本語のわかるアニメ視聴者が増加していることと関係しているとのことである。さらにインターネットの普及を背景とする「ハイパーローカル化」は、アニメファンが勝手に字幕を付ける「ファンサプ」などに典型的に見られ、“sensei”や“oyabun”など、日本語の表現をそのままアルファベットで表記した単語が英文に散りばめられる現象や、「夢を見ていた」が“You were seeing a dream”という日本語の直訳のように英訳される例が挙げられる。英語としては不自然な日本語風の表現を取って使うことで、個々の翻訳者が日本通であることを

ことを誇示するなどの動機があるとのことである。

井上氏は、具体的な事例を示しながら、このような翻訳傾向の変化を例にして、言語が経済やテクノロジー、また社会構造や文化と深く関わっていることを示した。（成田節）



＜会場の様子＞

**Tomomi OTSU “Conversation Research with Second Language Speakers”** The presenter raised the issues of how to apply the methods of Conversation Analysis normally used in native speaker research to research with second language speakers, and how this can contribute to Japanese language education. **Tokusu KUREBITO “The Derivation Relations in Verb Transitivity in Chukchi”** Chukchi is spoken in the far North East of continental Asia (Russian Federation), in and around the Chukchi Peninsula. The presenter, a Chukchi specialist based at TUFS ILCAA, described transitivity derivations in Chukchi verbs. **Ippei INOUE “Localization, Globalization and ‘Hyper-localization’ in English Translations of Japanese Animation”** The words “Localization”, “Globalization” and “Hyper-localization” capture the changing trends in English translation of anime and other Japanese content. The presenter gave the concrete example of English (subtitle) translations of “My Neighbor Totoro” in his discussion.

## 2017年度 活動報告 (2017年10月～2018年3月)

Activity Report (Oct 2017- Mar 2018)

### ■ 講演会・ワークショップ等 ■

- 12月9日(土) 対照日本語部門『外国語と日本語との対照言語学的研究』第23回研究会 鈴木 陽子氏、山越 康裕氏（東京外国語大学）、定延 利之氏（京都大学）
- 2月5日(月) 平成28年度文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型）」「認知の異なりが言語教育および言語習得に及ぼす影響－海外日本語教育インターンシップ実践の記録、および産出データからの考察」（研究代表者：東京外国語大学 谷口龍子、共同研究者：東京農工大学篠原和子）、国際日本研究センター国際日本語教育部門共催、共同研究発表会 谷口 龍子氏（東京外国語大学）、守時なごさ氏（リュブリアナ大学：スロベニア）、伊藤 怜那（立教大学学生）、チャン ティ ミー（東京外国語大学博士後期課程）、東 伴子氏（グルノーブル・アルプ大学：フランス）、林 俊成氏（東京外国語大学）
- 2月17日(土) 国際シンポジウム「次世代に向けた日本研究の可能性－ポーランド・ロシア・ウクライナ」マイヤー・スタニスワフ ヤン 助教授（ポーランド・ヤギェロン大学）、ウェインベルグ・ナジェージュダ 准教授（ロシア・イルクーツク国立総合大学）、アサドチフ・オクサーナ 准教授（ウクライナ・キエフ国立大学付属言語学院）、アガタ・クリコフ氏（ポーランド・本学大学院博士後期課程）
- 3月3日(土) 対照日本語部門『外国語と日本語との対照言語学的研究』第24回研究会 大津 友美氏（東京外国語大学）、呉人 徳司氏（東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所）、井上 逸兵氏（慶応義塾大学）

### ■ Lectures and Workshops ■

- Sat. 9th December 2017 : “Contrastive Study for Japanese and Other Languages” The 23rd Research Seminar by Yoko SUZUKI (TUFS), Yasuhiro YAMAKOSHI(TUFS), Toshiyuki SADANOBU(Kyoto University)
- Mon. 5th February 2018 : 2016/2017 MEXT Human Resource Development Program for Science and Technology “Program to Supporting Research Activities of Female Researchers” “The Influence of Differences in Cognition on Language Education and Acquisition – Record of Implementation of Japanese Language Education Overseas Internships and Observation of Data Produced” by Ryuko TANIGUCHI(TUFS), Nagisa MORITOKI (Assistant Professor, University of Ljubljana) reported on the receiving of interns. Chunchen LIN (TUFS), Tomoko HIGASHI (Assistant Professor, Université Grenoble Alpes), TRAN THI My (TUFS PhD student) and Reina ITO (then student at Rikkyo University)
- Sat. 17th February 2018 : The International Symposium “Potential for the Next Generation of Japan Research: Poland, Russia and Ukraine” by Dr. Stanislaw MEYER(Jagiellon University), Dr. Nadezhda VEINBERG(Irkutsk State University), Dr. Oksana ASADCHYKH(Kyiv National Taras Shevchenko University), Agata KULIKOW(a Polish graduate student at TUFS)
- Sat. 3rd March 2018: “Contrastive Study for Japanese and Other Languages” The 24th Research Seminar by Tomomi OTSU、Tokusu KUREBITO (TUFS), Ippei INOUE(Keio University)

### ■ 今後の活動予定 ■

- 5月24日(木) 比較日本文化部門 ワークショップ  
発表者：オリガ・ホメンコ氏（博報財団・国際日本研究フェロシップ招聘研究者、キエフモヒラアカデミー国立大学）
- 7月7日(土) 対照日本語部門『外国語と日本語との対照言語学的研究』第25回研究会門
- 7月11日(水)～13日(金) 国際日本研究センター主催  
夏季セミナー2018「言語・文学・社会」－国際日本研究の試み  
講師：  
孫建軍氏（北京大学）中国  
朱秋而氏（国立台湾大学）台湾  
金鍾德氏（韓国外国語大学）韓国  
リム・ベンチュウ氏（シンガポール国立大学）シンガポール  
スタニスワフ・マイヤー氏（ヤギェロン大学）  
ナジェージュダ・ウェインベルグ氏（イルクーツク国立総合大学）  
梁青氏（厦門大学）中国  
オリガ・ホメンコ氏（キエフ・モヒラアカデミー国立大学）ウクライナ

### ■ Future Events ■

- Thur.24 May2018 : Comparative Japanese Culture Division Workshop by Dr. Olga KHOMENKO (National University of Kyiv-Mohyla Academy)
- Sat.7 July 2018 : “Contrastive Study for Japanese and Other Languages” The 25th Research Seminar
- Wed-Fri, 11-13 July  
10:10-14:10, Summer Seminar 2018 “Language, Literature, History: Constructive Approach to International Japanese Studies”  
by SUN Jian Jun (Peking University)  
JU Chiou-Erl (Taiwan University)  
KIM Jongduck (Hankuk University of Foreign Studies)  
LIM Beng Choo(National University of Singapore)  
Stanislaw MEYER (Jagiellonian University)  
Nadezhda WEINBERG (Irkutsk State University)  
LIANG Qing (Xiamen University)  
Olga KHOMENKO (National University of Kyiv-Mohyla Academy)

アサドチフ・オクサーナ氏（キエフ国立大学）ウクライナ  
 峰岸真琴氏、鈴木智美氏、逆井聡人氏（東京外国語大学）日本  
 ※同時開催  
 「サマースクール院生研究発表会」  
 7月11日（水）～7月12日（木）14:20-17:30

Oksana ASADCHYKH (National Taras Shevchenko University of Kyiv)  
Makoto MINEGISHI, Tomomi SUZUKI, Akito SAKASAI(TUFS)  
※Associated event Summer School 2018  
“Postgraduate Students' Workshop in Japanese Studies”  
14:20- 17:30 Wed. 12 -Thur. 13, July , 2018

国際日本研究センター特任研究員紹介  
Introducing ICJS Visiting Researcher



国際日本研究センターは博報財団招へい研究者としてオリガ・ホメンコ先生を受け入れている（2018年8月まで）。ホメンコ先生は、キエフモヒラアカデミー国立大学人文学部歴史学科准教授として、日本史や東アジア史を教えている。同時に、『ウクライナから愛をこめて』（群像社 2014 年）の日本語の著書があり、『現代ウクライナ短編集』（群像社、藤井悦子と共訳）などもある、日本通の作家、通訳、ジャーナリストとしてすでによく知られた方である。東京大学大学院地域文化研究科で取得した博士号のテーマは「戦後日本における女性アイデンティティ形成と商品広告」であった。今回の招へい期間には、博士論文テーマを踏まえた研究を継続されている。比較日本文化部門は、5月24日にオリガ先生のワークショップを開催する予定である。テーマは「女性をターゲットにする戦後日本の自動車広告——社会規範の変化の観点から」である。乞うご期待！（友常勉）

## お知らせ

## Notice



## 『日本語・日本学研究』第8号発刊のお知らせ

2018年3月31日に弊社発行のジャーナル

『日本語・日本学研究』が発刊されました。

詳しい内容は以下の URL からご確認ください。

[http://www.tufs.ac.jp/icjs/images/publications/journal\\_008.pdf](http://www.tufs.ac.jp/icjs/images/publications/journal_008.pdf)

**“Journal of Japanese Studies” vol.8 has been released**

On 31st March 2018, the new issue of

“Journal of Japaese Studies” has been released.

The online data of publications are also available at the following URL.

[http://www.tufs.ac.jp/icjs/images/publications/journal\\_008.pdf](http://www.tufs.ac.jp/icjs/images/publications/journal_008.pdf)



## 東京外国語大学国際日本研究センター 比較日本文化部門 ワークショップ

「女性をターゲットとした戦後日本の自動車広告」

—社会規範の変化の観点から—

2018 年 5 月 24 日 (木) 17:45 ~

東京外国語大学 本部管理棟 2 階 中会議室

お申込み不要、一般公開

発表者：オリガ・ホメンコ氏（博報財団・国際日本研究フェローシップ招聘研究者、キエフモヒーラアカデミー国立大学）

*Thur.24 May2018 : Comparative Japanese Culture Division Workshop*

by Dr. Olga KHOMENKO (National University of Kyiv-Mohyla Academy)

Medium Meeting Room, Administration Building 2F, TUFS

Open to Public

For more information, please visit the link below

<http://www.tufs.ac.jp/icis/events/2018/20180524.html>